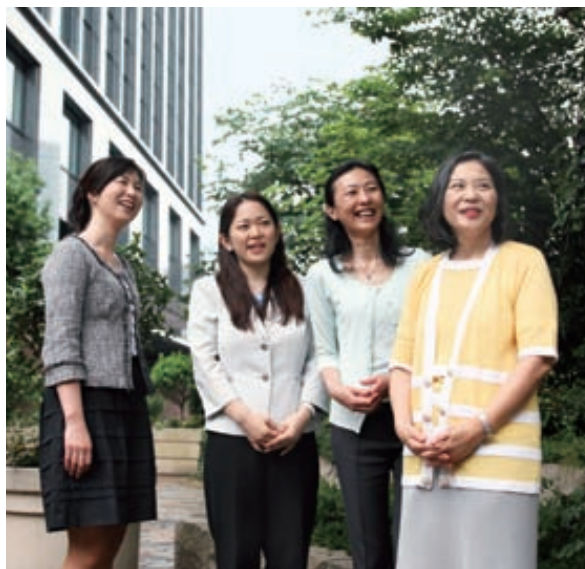
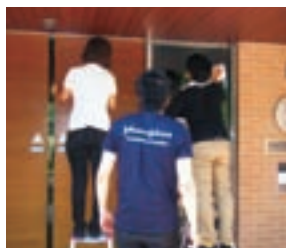


Johnson & Johnson



ジョンソン・エンド・ジョンソン

社会貢献レポート 2012

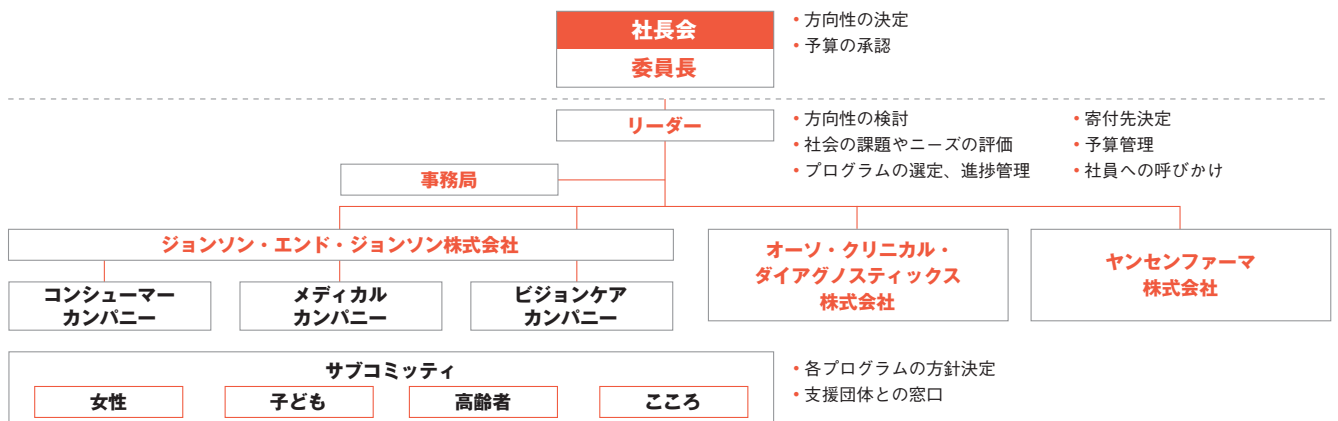
ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献活動

ジョンソン・エンド・ジョンソンは、
企業理念、倫理規定である「我が信条（Our Credo）」の
第三の責任「地域社会に対する責任」を日本において果たすため、
ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会（JJCC）を結成しています。

JJCCは、各事業会社から参加する
社員ボランティアによって運営されています。

ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献活動のテーマは、「健康」。
からだの健康だけではなく、
こころや、社会の健康についても
さまざまな観点から取り組んでいます。

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会（JJCC） 組織の構成と役割



ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会は、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社（メディカルカンパニー、コンシューマーカンパニー、ビジョンケアカンパニー）、オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社、ヤンセンファーマ株式会社で構成されています。

子ども

子どもが幸せに育つ
環境をつくるために



女性

女性がいつも生き生きと
明るい存在であるために



こころ

こころが元気な
社会を目指して



高齢者

高齢者の生きがいのある
暮らしのために



4つのサブコミッティ

J&Jの日本における社会貢献活動の推進役を担うJJCCは、健康に関する社会課題の中で、「子ども」「女性」「こころ」「高齢者」の4つの分野に注力し、それぞれでサブコミッティを構成しています。

サブコミッティではJJCCとして取り組むプログラムの方針を検討・決定し、パートナーとなるNPO（非営利団体）と協議しながら、さまざまな事業を支援しています。

📖 2～10ページ

NPOとの協働

地域の問題を地域の人たちと解決していきたいという考えから、JJCCは地域に根づくNPOとパートナーとなってプログラムを推進しています。現場での具体的な支援活動はNPOが実施し、JJCCは主として資金面や活動に関するアドバイスなどで協働しています。

📖 11ページ

その他の社会貢献活動

JJCCそのものが社員ボランティアによるものですが、個別にボランティア活動を行っている社員も少なくありません。JJCCはそうした社員のためにボランティアに関する情報を提供したり、その活動の母体となっている団体に寄付を行ったりしています。また、より多くの社員のボランティア活動を促進するために、気軽に参加できる企画やボランティア月間などの普及活動も実施しています。

📖 12～14ページ

アジア・パシフィック地域での社会貢献活動

J&Jは世界中で社会貢献活動を行っています。アジア・パシフィックでも各国・地域に日本におけるJJCCと同様の組織があり、国・地域の事情にあったさまざまな社会貢献活動を展開しています。

📖 16～17ページ

ジョンソン・エンド・ジョンソン

社会貢献レポート 2012 目次

ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献活動	2
子どもへの取り組み	4
女性への取り組み	6
こころへの取り組み	8
高齢者への取り組み	10
JJCC 活動の流れ	11
J&J社員のボランティア	12
東日本大震災への支援について	15
アジア・パシフィック地域での活動	16
ヘルシー・ソサエティ賞	17
グループ各社代表によるあいさつ	18

子どもへの取り組み

安全ですこやかな 成長を願って

子どもたちは未来の社会を築き、発展させていく存在です。

子どもサブコミッティは、そんな「社会の宝」である子どもたちが、安全に、そして健全に成長していけるように、乳幼児から青少年まで幅広い範囲の取り組みを進めています。

0歳児の死亡例では4.9%、1～4歳児の死亡例では16.4%が誤飲による窒息などの「不慮の事故」によるものです（厚生労働省平成21年人口動態統計年報）。

不慮の事故は先天的な疾患や病気とは異なり、その大半は周囲の大人が注意を向けることで防ぐことができるといわれています。

「保育士による家庭内での乳幼児の事故予防啓発事業」、「子

どもの事故防止セミナー」などは、子どもを取り巻く保護者たちが事故予防の知識を得ることで子どもの命を救うことを最終的な目的としています。

成長しても依然として子どもたちは周囲の環境に影響を受けやすい存在です。とくに思春期の子どもたちはさまざまな誘惑に迷い、家族や友人との人間関係に悩みがちなもの。ますます複雑化する現代社会にあっては、子どもたち自身が自分の力で考え、さまざまな問題を乗り越えていく力を身につけていく必要があります。

「思春期のライフスキル教育」プログラムは、そのために子どもたち、および、教育者たちを育成していく事業です。

今の困難を乗り越え、 未来の可能性を広げたい

子どもサブコミッティ リーダー

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) メディカル カンパニー

内田 謙二

私たちは、一人ひとりの子どもが健康でこころ豊かに育ち、希望に満ちた未来へ大きく羽ばたくことができるような環境づくりを目指しています。より多くの子どもにJ&Jの支援が届けられるよう、事故防止や生きる力を養う知識とノウハウを持つ指導者やインストラクターの育成に重点を置いています。

また、今後は「今困っている子どもたちをどう支援するか」という観点の活動にも取り組んでいきたいと考えています。

さまざまな困難に直面している子どもたちを支え、子どもたちの未来の可能性を今よりもっと広げたい。そのために必要とされていることは何なのか。それを考え、発見し、そして実践していきます。



子どもサブコミッティのミーティング風景。ホワイトボードの前に立っているのがリーダーの内田さん。

家庭内での不幸な事故を未然に防ぐ 保育士による家庭内での 乳幼児の事故予防啓発事業

社会福祉法人 日本保育協会
www.nippo.or.jp/



子どもが幼くして亡くなる原因として上位にあるのが「不慮の事故」です。これは保護者など周囲の大人の意識しだいで未然に防ぐことが可能といわれています。このプログラムでは、1人でも多くの保護者が乳幼児の事故予防に関する正しい知識を得られるように、保護者と日々関わる保育士を対象に事故予防指導のスキルや知識を学ぶセミナーを実施しています。

事故予防と応急手当の普及啓発

子どもの事故防止セミナー

公益財団法人 東京防災救急協会
www.teate.jp/



東京防災救急協会は、地域の要望に応じたセミナーを開いてきました。現在は、保育士、幼稚園教諭など子供に関する職種の方向けに事故防止に関する知識および応急手当の実技を学ぶ「乳幼児事故防止セミナー」と小学校低学年以下の子どもと保護者を対象に事故防止の知識と応急手当の実技を学ぶ「親子応急手当大会」を実施しています。

自分で問題を乗り越えられる力を子どもたちに

ライオンズクエスト 「思春期のライフスキル教育」プログラム

特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム
www.jiyyd.org/



青少年が人間関係やさまざまな誘惑など日常で体験する困難を乗り越えるために、コミュニケーションの取り方、感情のコントロールの仕方などのライフスキルを学び、勇気、正直、自分を律するなど9つの価値観を身につけ、自尊心の高い人間として成長していくためのプログラムです。

研修を受けた教員により、学校現場でライフスキルの授業が実施されます。青少年育成支援フォーラムは、ライフスキル教育プログラム普及に向けたカリキュラムや教材の開発、教師など教育関係者を対象としたワークショップを開催しています。

▶ 支援の現場から ライオンズクエスト「思春期のライフスキル教育」プログラム

地域全体で子どもの成長を支える社会へ

特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム
馬淵 英晃さん

家族や友人との関係、酒やたばこ、ドラッグの誘惑など、思春期の子どもたちは多くの困難に直面します。私たち青少年育成支援フォーラムは、それらを自分で乗り越えていく力を身につけてもらうために「思春期のライフスキル教育」プログラムの普及・推進活動を行っています。

プログラムに参加した生徒からは、「相手の気持ちを考えて話すようになった」「クラスの雰囲気が明るくなった」といった声が聞かれています。

また、ワークショップに参加して授業に取り入れた教師からは「指導方法の引き出しが増えた」という声が聞かれ、自信を持って生徒に接することにつながっているようです。

私たちは保護者への理解の促進や地域団体への働きかけも行っています。学校や家族だけでなく、地域全体で子どもの成長を支える社会をつくるのが目標です。



自分自身の成長を感じはじめた子どもたち

栃木県黒磯市立 黒磯北中学校
川崎 由香さん

当校では全学年の全クラスで「ライフスキル教育」プログラムを授業に取り入れています。私の担当クラスでは、これまで2年間弱、継続してきました。すでに大きな変化が見られますし、続けていけば成果はより大きなものになるでしょう。

ライフスキル教育を導入した第一の理由は「自尊心を高めたい」というものでした。子どもたちは大人が思っている以上に自分に自信を持っていません。普段から人と接することに恐怖や抵抗を感じている生徒が多いのです。しかし、このプログラムを体験した後のアンケートを見ると皆が少しずつ自信を持ち始めているのを感じます。人との接し方、ほめ方をプログラムを通して学び、学んだことを実践することで自分の成長が感じられ、自信を深めることができるのです。

また、子どもたちだけでなく、このプログラムは私たち教師を成長させる機会にもなっていることを実感しています。



女性への取り組み

笑顔で生き生きと すごせるように

女性は家庭にあっては家族の健康に気を配り、精神的な支えになり、未来を担う子どもを育てるという重要な立場にあります。また、よりよい社会をつくるためにその一員として大切な役割を果たしています。家庭や社会が健全に営まれるためにも、女性サブコミティでは、女性たちが生き生きと輝く社会をめざしています。

女性を取り巻く課題を考え、現在は大きく4つのテーマに力を入れています。

1つは、DV（ドメスティックバイオレンス）の経験にあった女性へのサポートです。DVの被害を受けた女性のこころをケアし、前向きに生きていく力を身につけてもらうために「こころのcare講座」の実施・普及を支援しています。

2つめは、子育てに悩む親へのサポートです。児童虐待防止の観点から、子どもにとっても親にとっても心地よい親子関係を築くための育児法「スター・ペアレンティング」の普及活動を進めています。

3つめは、女性向けの健康情報の提供です。現在はその一環としてJ&J社員ボランティアとともに健康情報を音訳する「声の花束」活動に取り組んでいます。

4つめは、ひとり親家庭を対象とした自立支援です。経済的な自立に向けた相談や支援が広がっていくよう、「シングルマザー支援事業」を進めています。

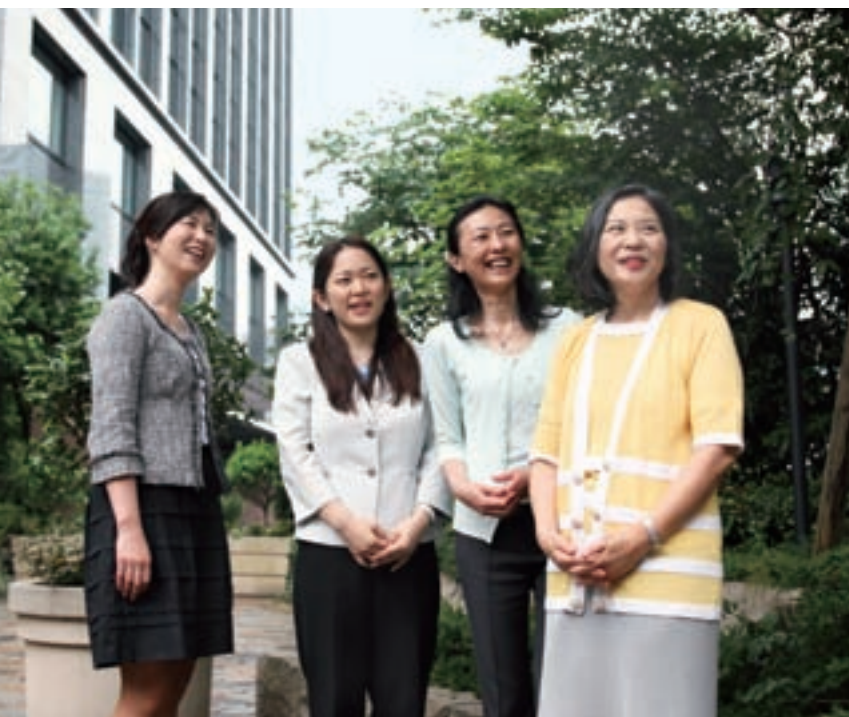
一人ひとりの女性に寄り添い 暮らしの手助けをしたい

女性サブコミティ リーダー
オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス(株)
森 香奈子

この数十年で女性の社会進出が進み、女性自身も、多くの方が自分の活躍の場を広げていくことをめざしています。一方で、子育てをしながら働くことに悩みを抱えていたり、助けを求める相手がいないために孤立感を感じている女性も少なくありません。

私たちは、一人ひとりの女性に寄り添い、彼女たちが健康的にいきいきと暮らす手助けをしたいと願っています。

DV、子育て、女性のための健康情報など、従来からの取り組みに加えて、2011年度からはひとり親家庭の問題にも向き合っています。周囲からのサポートが得難い環境での子育てや、経済的な困難に直面している方を対象に、就業や自立に向けた総合的な支援に力を入れていきたいと思っています。



女性サブコミティの会合はいつも和やかな雰囲気です。
左から2番目がリーダーの森さん。

前向きに生きていける力を

こころのcare講座

特定非営利活動法人レジリエンス
www.resilience.jp/

DVのさまざまな形態、トラウマに対するための対処法、家族や自尊心などについて、ファシリテーター（進行役）とともに学び考え、女性自身が自分のパワー（resilience：回復力）を再確認し、新しい自分の姿を見つけていく講座です。

また、この講座を全国各地域に普及させていくために、ファシリテーターの養成講座にも力を入れています。



子育ての悩みが解消する育児法を学ぶ

スター・ペアレンティング・プログラム

NPO法人女性と子どものエンパワメント関西
www.osk.3web.ne.jp/~videodoc/

育児に対する過剰な責任感や時間的・精神的余裕の不足のために子育てを息苦しく感じて虐待につながるケースがあります。スターペアレンティングは、母親が抱える問題を解決し、親自身も自分を大切にしながら、叩かず、甘やかさず、楽しみながら子育てする方法です。この方法を学ぶ講座や広く普及させるためのファシリテーター養成講座を開催しています。



「女性のための健康情報提供」

音訳ボランティアサイト 「声の花束」

公益社団法人日本フィランソロピー協会
www.philanthropy.or.jp

活字メディアによる情報入手が困難な方々の社会参加を促進するため、生活情報や文学作品などの情報を音声の形で配信しているのが「声の花束」サイトです。

現在、J&Jの社員有志が音訳ボランティアとしてこのサイトに参加し、ジョンソン®ベビーの「赤ちゃん相談室」など女性向けの健康に関する情報の音訳活動を続けています。



ひとり親家庭の悩みに応える環境整備

シングルマザー支援事業

NPO法人しんぐるまざあず・ふおーらむ
www.single-mama.com/

ひとり親世帯全体での貧困率は50.8%（厚生労働省、平成21年）。特に母子世帯数は父子世帯数の約8倍（同、平成18年）に達します。そうした背景の中で、子育てや日々の生活について悩むシングルマザーが自立に向けて相談できる環境を整備し、支援に携わる人材のトレーニングや、支援者の拡大を目的としたシングルマザー支援者養成講座を開催しています。



▶ 支援の現場から こころのcare講座のファシリテーター養成

DVの正しい認識を広め、 社会を変えていく

特定非営利活動法人レジリエンス
中島 幸子さん

私たちは、DVの被害を受けた女性をケアし、前向きに生きていく力を身につけてもらうため「こころのcare講座」を開講しています。また、この講座を全国に広げていくためにファシリテーター養成講座も設けています。現在600名を超えるファシリテーターが誕生し、全国50カ所で講座が開催されています。

DVやトラウマに関する講演を開くと、講演を聞いた男性から「自分がやってきたことはDVかもしれない。もっと早く気づくべきだった」といった声が聞かれるようになりました。

DVへの正しい認識は残念ながらまだ社会に浸透していませんが、より多くの人正しい知識を持つことで、身近にいる女性を適切にサポートできるようになります。

DVはパワハラや虐待にも共通する面があります。こうした活動を通して肉体的・精神的な暴力が減り、社会が変わっていくことが私たちの理想です。



傷ついて弱くなった自分の力を 回復してほしい

一般社団法人 notice
竹内 由紀子さん

私は、ファシリテーター養成講座を受講して、現在、千葉県で「女性のためのcare講座」を実施しています。

ファシリテーター養成講座では、12回の講座一つひとつのテーマが明確になっています。例えばグリーフ（悲嘆）ケアでは、私自身、自分がどのような心の傷を抱えているのか、自分の本当の感情はどのようなものなのかに気づかされました。

自分の心の傷に気づくことは、自分で解決する力を身につけることにつながり、DVの被害を受けた女性にとって非常に大切なことです。

私はDV加害者向けのプログラムも開いていますが、レジリエンスファシリテーター養成講座で学んだことは、ここでもパートナーの傷つきに共感するという点で活かしています。

心に傷を受けた方々が、今後自分が何を大切にしながら生きていくか、多くの選択肢を見つけられるようになってほしいと願っています。



こころへの取り組み

こころの健康のために

充実した健康的な生活を送るためには、からだの健康と同じようにこころの健康も大切です。こころに関する問題は顕在化しにくい側面もありますが、実態は非常に深刻です。こころサブコミティは、こころへの負担が少ない環境とこころの健康に理解のある社会を目指しています。

年間の自殺者数は1998年以降、14年連続して3万人を突破しています。家族を自殺で失い、苦しむ方もかなりの数に上ります。子どもサブコミティは自殺防止対策に力を入れ「自殺のない社会づくり市町村会」「電話相談活動」を支援しています。

現代の生活の中では仕事や人間関係の悩みやストレスなど

から気持ちが弱くなったり自信を失ったり、精神的な病気にかかることもあります。

当事者とその家族をサポートする目的で、統合失調症の患者を持つ家族向けのプログラム「家族による家族学習会」の普及、学習会を進めていく役目を担うリーダーの養成を支援しています。

近年、AD/HD（注意欠陥／多動性障害）などの発達障害に対する社会的認知は広がってきているものの、なお誤解や偏見も残っています。AD/HDを豊かな個性の1つとしてとらえ、同時に苦手な部分をサポートできるよう、「ストレスマネジメント講座」「サマートリートメントプログラム」を支援しています。



複雑なこころの問題と向き合う、こころサブコミティ。
右がリーダーの大塚さん。

誰もが生きやすい世の中をつくるために何をなすべきか

こころサブコミティ リーダー
オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス(株)
大塚 一郎

これまで私たちは、年間3万人を超える自殺者数の減少や、精神疾患および発達障がい理解のある社会をめざし、自殺防止プロジェクトや患者家族への支援に関わってきました。

そうした活動の効果は目に見える形で進んでいます。私自身の実感として、例えば自殺対策の基盤づくりは以前に比べ進展したという手ごたえを感じています。これから先も、より高い効果を得られる活動を模索し、継続していきたいと思っています。

誰もが生きやすい世の中をつくるために何をすべきか、一人ひとりが考えるようになれば社会は変わっていくはず。社会へはもちろん、J&J社員への働きかけを強化し、企業全体で社会問題に取り組んでいく風土を作りたいと思っています。

自殺対策の広がり支援

自殺のない社会づくり 市区町村会

特定非営利活動法人
自殺対策支援センターライフリンク
www.lifelink.or.jp/hp/top.html



政府・自治体・全国の民間団体・議員・専門家などありとあらゆる「つながり」を活かしながら政府への提言、自殺対策の都市型モデル作り、成功事例や課題の共有など、自殺対策を自律的な安定軌道に乗せるための事業を展開しています。

自殺を考えるほど、つらい気持ちを抱える方のために 電話相談の充実

特定非営利活動法人 国際ビフレンダーズ 東京自殺防止センター
www.befrienders-jpn.org/



自殺を考えるほど悩む人々が自身のつらさや苦しみを安心して訴えられる場を提供し、その方の感情に寄り添うボランティア相談員の普及やその質の向上を目的として研修、自殺防止への取り組みを広げる活動を展開しています。

夏休みにAD/HDの子どもたちが学ぶ サマートリートメントプログラム

NPO法人くるめSTP
kurume-stp.org/



AD/HDを持つ小学生を対象とした夏季集中治療プログラムです。通常の学級や通院治療ではアプローチしにくい学習スキルやソーシャルスキル、スポーツスキルなどの改善・向上をめざし、自信や自尊心が育つように支援しています。

心がラクになる考え方のコツを知る

ストレスマネジメント講座

特定非営利活動法人えじそんくらぶ
www.e-club.jp/



発達障がいや類似の特性を持つ子どもの子育てに悩む親や、その親をサポートする専門家を対象とした「ストレスマネジメント講座」を実施しています。この講座は、子どもに接する親のストレスを軽減することで、子どもの安定が期待できるといわれています。また、同時にストレスマネジメント指導者を育成するプログラムも進めています。

精神疾患を持つ患者家族への支援

家族による家族学習会

特定非営利活動法人
地域精神保健福祉機構 (COMHBO)
comhbo.net/



統合失調症などの精神疾患の患者家族自身が他の患者家族に知識と体験を伝える活動は世界で実績をあげている方法です。この学習会を実施する際のアドバイザーや指導者の養成も行い、普及をはかっています。

▶ 支援の現場から ストレスマネジメント講座

AD/HDへの正しい理解を 日本中に広げる

特定非営利活動法人えじそんくらぶ
高山 恵子さん

私はアメリカの大学院に留学中AD/HDを知り、同時に自分がAD/HDであることに気がつきました。当時、アメリカでは啓発活動が活発に行われていましたが、日本ではAD/HDの正しい理解が進んでいませんでした。1997年にAD/HDだったといわれる発明王エジソンにちなみ「えじそんくらぶ」を設立しました。

私たちは、AD/HDの小学生を対象にしたプログラムや、子育てに悩む親をサポートする「ソーシャルスキルトレーニング」を実施しています。特に親への支援を大切にしており、「ストレスマネジメント講座」はその1つです。親や支援者にインストラクターになってもらい、活動を全国に広げていくことにも力を入れています。

この活動を継続し、広げていくために、これからもJ&Jと手を取り合っていきたいと願っています。



仲間がいることの 心強さを実感

特定非営利活動法人えじそんくらぶ
橋口 亜希子さん

私は、長い間自分の子どもがAD/HDであることに苦しんできました。このような思いをしているのは自分だけ。自分一人で何とかしなければいけないと思い続けてきました。

しかし、たまたま「えじそんくらぶ」の講演を聞き、救われる思いがしました。自分と同じことで悩んでいる人がいる、一緒に助け合っていける、と思えたのです。

仲間とつながっている実感を得られた。これは本当に大きなことでした。

自分の周囲に同じ境遇の人はいないとしても、助け合える仲間は全国にたくさんいます。同じ悩みを持つ方には、ぜひ、えじそんくらぶを知ってほしい。今では私も「ストレスマネジメント講座」のインストラクターとしてこうした活動を広めるお手伝いをしています。



高齢者への取り組み

いつまでも幸せを感じられる社会

日本の総人口に占める65歳以上の人口の割合は23.1%にも達しています（平成23年版高齢社会白書）。日本は世界で最も老年人口が多く、今後もさらに高齢化が加速していくといわれています。

高齢化が進む中、身体機能・認知機能の低下によって自信を失い、孤立感や不安感を持つ高齢者が少なくありません。また、仕事から引退することで人間関係が希薄になるケースもあります。

私たち高齢者サブコミティは、年齢を重ねてもこころ豊かに暮らせる社会を目指し、高齢者が地域の人々とつながり、充実感を持って過ごすことができるよう、高齢者と若い世代が語りあう「世代間交流寺子屋回想法」を支援しています。

世代間交流の普及を目指して

寺子屋回想法

上智大学総合人間科学部
老年心理学研究室



寺子屋回想法とは、過去の体験を語ることでこころの安定を取りもどす心理療法「回想法」を応用・発展させたものです。高齢者と若い世代が語り合う世代間交流を通して、高齢者のこころの健康を保ち、世代間のつながりを深めます。

また、それぞれの地域にあったプログラムを企画・運営できるリーダーを養成し、この方法を全国各地に広めるためのワークショップも開催しています。



高齢者サブコミティメンバーのミーティング風景。
中央がリーダー・伊藤さん。

地域とのつながりの中で 高齢者を支えていきたい

高齢者サブコミティ リーダー
ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) メディカル カンパニー
伊藤 佐和

私たちは現在、異なる世代がともに高齢者の人生を振り返り、生きる知恵を伝承する「寺子屋回想法」の普及を支援しています。交流を深める場において、高齢者は自身の経験を活力にあふれた表情で語り、若者も非常に熱心に話を聞いています。こうした活動を通じて、同じ地域に暮らす若い世代と高齢者との距離が縮まっていくことが理想です。

今後、高齢化が進む中で増え続ける独り暮らしの高齢者を地域とのつながりの中で支える活動がますます重要になってきます。

高齢者サブコミティは、従来の活動に加えて、今後は、主に一人住まいで孤立しがちな高齢者を地域全体でサポートしていく活動も積極的に支援していきたいと考えています。

JJCC ジョンソン・エンド・ジョンソン 社会貢献委員会

活動の流れ

地域の問題を地域の人々と解決していきたいという考えから、J&Jの社会貢献活動は、非営利団体（NPO）との協働で行われます。

NPOと信頼関係を結び、プログラムを中長期的に支えるのが私たちの役割です。



1 支援対象の見極め

社会の中で、特に支援を必要としている対象は誰なのかJJCCメンバーで話し合います。現在、私たちは、子ども、女性、こころ、高齢者の4つの領域を中心に活動しています。



2 支援対象を取り巻く課題の精査

4つの領域の中でどのような問題が起きているのかを調査します。例えば子どもの領域では、乳幼児の死因の上位に不慮の事故があり、これは周囲の大人が知識を持っていれば予防できることがわかりました。課題を一つひとつ洗い出していきます。



3 解決方法の検討・NPOの選定

課題の解決方法を検討し、解決に向けた活動をJJCCのパートナーとして実践できるNPOを探します。NPO選定の際は、その分野に詳しい学識関係者にアドバイスを求める場合もあります。



4 目標設定・スケジュールリング・活動開始

パートナーになったNPOと協議しながら、活動内容・支援方法を決定し、支援活動を開始します。この際、明確な目標を設定し、達成に向けた綿密なスケジュールを組むことを理想としています。



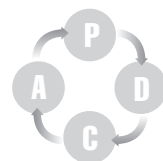
5 活動内容検証

現場での支援活動はNPOが中心になって進めていきます。JJCCメンバーはNPOとの定期的な打ち合わせや現場への参加を通して、進捗の確認、活動内容の検証を行い、より効果的な活動のためにさまざまなアイデアをNPOに提案していきます。



6 社員の専門スキルの活用・自主参加

支援活動を進めていく中で生じた課題解決のためにJ&J社員が持つ専門スキルを活用することもあります。また、個人として共感した社員が自主的に関わっていくこともあります。



NPOとの協働でJJCCが重視すること

① お互いの思いを共有する

私たちは活動によって対象とする人々の生活や社会によりよい変化が起ることを目指しています。目指す方向や実現したい社会のイメージをパートナーであるNPOと共有することは協働で支援活動を進めていく上で不可欠です。

② 明確で具体的な目標を設定する

NPOと協働する際、私たちは具体的な目標の設定を重要視しています。そうすることで初めて、達成のために何が必要か、どのような課題があるのかを明確に考えられるようになるからです。それらを見極め、支援内容を検討していきます。

③ 活動内容を検証する

私たちは、活動計画に対して何をどこまで達成できたか、結果が社会にどのような影響を与えたかをNPOとともに振り返り、検証することを重視しています。これをより効果的な活動につなげ、目標を達成していきます。

地域の方と触れ合い、支えあっ

身近でできる ボランティア活動

知的障がい者との触れ合い

笑顔に触れ、 温かみを感じ、 自分の成長を実感できる



オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス(株)
中村 勉

障がい者の方々の 自立を目指して

群馬県に住んでいたときに参加した児童養護施設でのボランティア活動が楽しかった思い出がありました。名古屋への転勤後も仕事以外で人の役に立ちたいと思っていたところ、JJCCより愛知県内のボランティア紹介があり、参加しました。

大森授産所は知的障がい者の就労支援を行っている施設です。知的障がいと言っても、ある程度会話できる方、自分で言葉を発するのが難しい方、気分の上がり下がりやが激しい方などさまざまです。このような知

的障がい者が就労し、自立できるよう手助けするのが大森授産所です。

同施設のボランティアに求められているのは、知的障がい者の方々と行動をともにし、会話することです。施設外の人間と触れ合い、日常の活動を通して社会の中で生きていく能力を身につけることを目指しています。

新しい自分を発見する機会に

ボランティアに参加してみると、最初は戸惑うことばかりでした。話をしても、障がい者の方が何を伝えたいのか理解できないことがよくありました。しかし、お好み

焼き作りやボウリングを一緒にしていく中で、少しずつ変化が出てきました。私に話しかけてくれ、ハイタッチなどスキンシップをとってくれたのです。笑顔も出るようになり、私の心も明るくなりました。知的障がい者の皆さんと触れ合い、やさしさをもらい、喜びを感じました。活動に参加して自分も成長できていると実感しています。社会貢献は新たな自分を発見できる機会ではないでしょうか。

私は単身赴任のため、毎週ボランティアに参加することはできませんが、無理のない範囲で継続的に楽しく参加していきたいと思っています。



作業、餅つき大会、みんなで食事、大森授産所の様子

ボランティアの方との触れ合いが 障がい者たちを成長させる

大森授産所は障がいを持つ方をサポートする福祉施設です。特に注力しているのが障がい者の就労支援です。福祉施設に入ると、そこが終着点となる障がい者が多くいます。私は福祉施設は通過点だと思っています。施設で成長し、社会に出て行ききっかけを提供したいのです。しかし、障がい者雇用はまだ進んでいません。障がい者への先入観や、保護者や福祉施設が閉鎖的な面もあり、互いの理解が不足しています。

この社会を変えるため私たちは開かれた施設を目指し、積極的に地域社会と触れ合い、ボランティアを募ってきました。それによって世間の方々の認識を変えたいのです。

また、ボランティアの方々と接することは、障がい者たちにとって社会のルールやコミュニケーションの取り方を学ぶ貴重な機会です。利用者たちはボランティアの方々と会えるのを本当に楽しみにしています。彼らの笑顔を見ていただ

ければ、それがよく分かるはずですよ。

ボランティアへの参加は気楽なことではありませんが、得られるものは決して小さくありません。ぜひ多くの方に参加していただきたいです。

J&Jには社員のボランティアを支援する仕組みがあります。それによって交流が生まれるのですから、本当に素晴らしいことだと思います。ぜひ、J&JとJ&Jで働く皆さんに、社会を変える後押しをしていただきたいと思います。

社会福祉法人
大森福祉会
大森授産所

酒井 光雄さん

www1.ocn.ne.jp/~omori/



J&J社員のボランティア参加を促進することもJJCCの重要なテーマの1つです。社員が自主的に関わるボランティアの輪はさらに広がっています。

誰もが参加できる ボランティア月間

JJCCは、6月の1か月間を「ボランティア月間」として全国各地でボランティアの機会をJ&J社員に提供します。身近な地域の方や被災地の仮設住宅で暮らす方と触れ合う活動、物品寄付、社内イベントなど、さまざまなプログラムを用意しています。誰もが身近なところで楽しくボランティアに参加できることがこの企画の狙いです。ボランティア月間はAPCCのリードのもと、2010年に始まりました。

※APCC：アジア・パシフィック社会貢献委員会。アジア・パシフィック14か国、香港、ビジョンケア・アジア・パシフィックによって構成され、アジア・パシフィック地域におけるJ&J社会貢献活動の統括的役割を果たしています。



ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
ビジョンケア カンパニー
宮原 由佳

水治訓練

参加することで
新しい発見が得られる

水治訓練とは、温水プールなどを利用して行う障がいのある子どものトレーニングです。私にできるのか不安でしたが、「できなかったことができるようになっていく」様子を目の当たりにし、また彼らの笑顔で、私にもできることがあると感じました。私たちが地域社会に関わることで、人とのつながりが増えていくと思います。



ヤンセンファーマ(株)
加藤 舞

視覚障がい者へのガイド

これまで気づけなかった
感覚や環境への対応を学べた

アイマスクなどを使用した体験型講習で、視覚障がい者を誘導する難しさと視覚以外の感覚が敏感に働くのを体感しました。ボランティアを通じて、さまざまな人とつながりを持てただけでなく、これまで気づけなかった感覚や環境への対応を学べたことは、大きな収穫でした。またこのようなガイドの機会を持ちたいと思います。



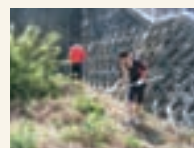
ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー

谷元 重智

清掃活動・運動会のお手伝い

役に立てていることを実感し、
爽快な気持ちになれる

私は広島修道院で活動しています。ここではさまざまな事情により家庭で養育を受けられない約120名の子どもたちが生活しています。一昨年は施設内で草刈り、昨年は里親や地域の人々が参加する運動会の手伝いを行いました。いずれも夏の炎天下で汗だくでしたが、役に立てていると実感でき、とても爽快な気持ちになりました。



ヤンセンファーマ(株)
橋口 信博

花壇整備

どんなことでも
喜んでもらえる

福岡こども病院の花壇整備のボランティアに参加しました。活動を通じて、さまざまな人と交流できたのは、大変有意義だったと思っています。また、どんなことでも喜んでもらえる知り、頑張って体を動かししました。ひと通り作業が終わったあと、整備した花壇を見る患者さんやご家族の笑顔に、喜びと充実感を感じました。



ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
コンシューマー カンパニー

武田 直樹

児童養護施設訪問

得意分野で
社会貢献をしていく

2008年の鐘の鳴る丘少年の家訪問開始当初から参加をしています。毎年訪問すると、子どもたちが成長している様子を見ることができます。また、継続して関わることで信頼を得られると、子どもたちは安心していろいろなことを話してくれます。いつも元気な子どもたちとの関わりから私自身がパワーをもらっています。



さらに広がるボランティア活動

JJCCは社員のボランティア活動を促進するためにさまざまな取り組みを行っています。

いろんな形の ボランティア

声の花束

目の不自由な方をはじめ、活字による情報入手が困難な方々に「声」で情報を提供する活動です。JJCC女性サブコミティが日本フィランソロビー協会と協働で企画・運営し、J&Jの社員ボランティアがジョンソン・エンド・ジョンソン(株)コンシューマーカンパニー「赤ちゃん相談室(www.johnsonson.jp/baby/faq/)」に掲載されている健康情報を音訳して紹介しています。



緊急災害支援募金

地震などの自然災害によって大きな被害がもたらされた地域に対して、被災された人々の生活支援や地域の復興を目的として、緊急災害支援募金を実施しています。J&Jグループ社員から集められた募金に会社からのマッチングギフトを加え、現地の支援団体を通じて被災地へ届けます。2011年度は東日本大震災とタイ大洪水に対して社員から温かい募金が集められました。



「買うボランティア」～被災地物産展～

2011年6月から3か月にわたり、宮城、福島、岩手のアンテナショップに協力していたため、各県の物産展を東京・千代田区のJ&J本社で開催しました。

この物産展は、JJCCメンバーの「何かしたい」という思いから実現したものです。通信販売も実施し、多くの社員の参加につながり、大盛況のうちに終わりました。主催メンバーは2012年度も引き続き同様の企画を実行したいと考えています。



鐘の鳴る丘少年の家訪問

鐘の鳴る丘少年の家ではさまざまな事情で家族と一緒に暮らせない幼児から高校生までの70名が共同で生活しています。施設では近隣住民との良好なつながりを大切にしながら、家庭的な環境の中で生活体験を積むことで、子どもたちの社会的自立を促しています。JJCCでは毎年2回、鐘の鳴る丘少年の家に社員ボランティアを派遣しています。

子どもたちと楽しい一日を過ごした社員たちは元気をもらっています。



ボランティア情報提供

JJCCのイントラネット上でJ&J社員が参加できる、身近なボランティア活動を随時紹介しています。初心者でも参加できる内容や、土日の活動など、ボランティア体験を希望する社員が自分に合ったボランティアを見つけることができるよう工夫しています。



社員のボランティア 活動を後方支援

寄付申請

J&J社員の自主的なボランティア活動を応援する目的で、JJCCでは主に社員がボランティアとして活動に参加しているNPOを、活動資金やJ&J製品の寄付という形で支援しています。2011年度は32団体へ寄付を実施しました。



社員がJJCCの活動や NPOの活動を知る

コントリビューション☆ウィーク2011

2011年9月20日から22日までの3日間、JJCCのパートナーとして協働しているNPOのメンバーを講師としてJ&J本社に招き、講演会を開きました。現代の社会の中で、支援を必要としている対象はどこにいるのか、どのような解決方法があるのかを学びました。

また、講演を聴いてJJCCの活動に興味を持った社員はJJCCサブコミティーメンバーの一員として、活動に参加しています。



高齢者サブコミティーイベント

2011年11月29日、J&J本社で寺子屋回想法の勉強会を行いました。寺子屋回想法とは、過去の体験や出来事を語ることで心の安定を取り戻す「回想法」を応用した心理療法の一種で、高齢者と若い世代が語り合う場を設ける取り組みです。勉強会では高齢者と交流するためのヒントを学ぶために、回想法の効果や話を「聴く」コツ、ロールプレイなどを行いました。



J&Jは長い視点で 支援を考えています

東日本大震災からの復興は、日本社会全体にとって、そしてその一員として活動する私たちJ&Jにとって最も重要な課題です。

私たちは発生当初から、地域のみなさんの声を聞きながら被災地域への支援に取り組んできました。

震災後1年以上の時間が経過しましたが、復旧のプロセスは終了しても、復興へのプロセスは今まさに進行中です。

私たちの支援活動も短期間で区切りがつくものではなく、これからも長期にわたって取り組んでいくべき課題であると考えています。

震災直後からの取り組み

震災発生以降、J&Jは時間とともに変化する被災地の情勢を把握し、そのときどきの地域のニーズに対応できるようにグループ会社各社で自律的に、かつ協働しながら取り組んできました。

道路などの交通網が寸断し、物資が不足した震災直後の時期には、緊急に必要な物資を被災地に届けました。また、自社の医療・生活支援関連物資の提供や、医療設備の復旧支援などを行ってまいりました。同時に、社員から緊急災害支援募金を募り、会社からの寄付とあわせて、被災地に届けました。

これらと並行して、社員のボランティア活動も広がっていきました。震災をきっかけに設けられた特別ボランティア休暇制度を利用し、JJCCから発信するボランティア情報も活用しながら、多くの社員が支援活動に参加しています。

9月に実施されたボランティア月間では、仮設住宅での足湯ボランティア、沿岸部での瓦礫撤去の企画に社員ボランティアが参加しました。

今後も積極的に取り組み続けます

これらの支援活動の源泉となっているのは、J&Jが事業運営の中核として大切に守ってきた企業理念「我が信条」です。その第3パラグラフには、

我々の第三の責任は、我々が生活し、働いている地域社会、更には全世界の共同社会に対するものである。

と謳われています。

地域社会への貢献は、J&Jおよびその社員にとって、企業活動をしていく上で求められている責任なのです。

現在も、仮設住宅でのコミュニティ形成や高齢者ケアシステムの再構築などを目的とする取り組みを開始し、ほかにも放射能禍の影響の残る福島県を対象にしたプログラムなど、JJCCが取り組む4つのテーマ「子ども」「女性」「こころ」「高齢者」とあわせて複数の新しい事業への支援を検討しているところです。

J&Jは、東日本大震災被災地への支援を長期的な視点で捉えています。これからも地域にニーズがある限り、さまざまな形で積極的な支援に取り組んでまいります。



グループ会社のヤンセンが支援した医療設備の復旧



仮設住宅ボランティア参加社員の集合写真



仮設住宅で支援活動する人々に向けたトレーニングの様子

■アジア・パシフィック地域での活動

世界中の人々に 健康と幸せな生活を

ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献活動は世界中で行われています。数多くの活動の中からアジア・パシフィック地域の活動の一部をご紹介します。

A マレーシア Malaysia

マレーシアのパハン州ではHIV感染者が増加しています。特に薬物を使用していた人に顕著に見られます。J&Jは、元薬物使用者が立ち上げた「パハン薬物防止共同体」(Drug Intervention Community Pahang / Dic Pahang)を支援して、2010年に若者を対象に「仲間の教育係 (Peer Educator) プログラム」を中心とした活動を立ち上げました。

これは若者の役割意識をより高めて、薬物やHIV/AIDSについて仲間たちを啓発していく活動です。これまでに仲間の教育係として

HIV/AIDS・薬物使用に関する「仲間の教育係」

トレーニングを受けた45人の若者が、約150人の仲間に啓発活動を行ってきています。



B 韓国 Korea

母乳は生後6カ月までの乳児にとっての完全栄養食だと考えられています。母乳育児の利点は長年の研究により実証されており、免疫系を活性化し、下痢や急性呼吸器感染症から乳児を守ります。

しかし、韓国では母乳育児率が比較的低く、2001～2009年に母乳のみで育児を行っている母親はわずか31%でした。粉ミルクの過剰なマーケティングや母乳育児を敬遠する病院や託児所、そして母親のさまざまな事情が原因と考えられます。

より多くの乳児が 母乳で育てられるように

J&Jは、この状況を改善し、韓国の母乳育児率を高めることを目的として、ユニセフの母乳育児キャンペーンを支援しています。



C 中国 China

近年中国では、高齢者の自殺が深刻な問題となっています。北京自殺研究・防止センターの統計によれば、56歳以上の高齢者の自殺者数は毎年約10万人に達し、中国国内の自殺事例の36パーセントを占めています。

J&Jは、2009年よりBeijing I-Ching Academyと提携し、中国初の全国規模の命の電話「ラブ・デリバリー・ホットライン」を支援しています。

ホットラインは4つの回線があり、それぞれにボランティアの心理学者がついて、毎日カウンセリングを行っています。これまでにこの

高齢者の自殺を防ぐ、 中国初の「命の電話」

ホットラインはおよそ8300名の高齢者を自殺から救っています。



D ベトナム Vietnam

新生児の命を救う 医療従事者の養成



ベトナムでは、新生児の死亡率が依然として大きな問題となっています。実際、政府の改善努力にもかかわらず、毎年1000人あたり10人の新生児が死亡しています。

J&Jは、ベトナム保健省の新生児救命戦略を支援するため、2010年より主要な4つの産婦人科病院と提携し、医師、看護師、助産婦といった医療従事者に対し、新生児蘇生法と産科の緊急処置の研修を実施しています。これまで、424の地方で募集した総勢2500名の医師、看護師、助産婦に対し、研修を実施してきました。これらの地方で生まれる子どもの総数は新生児全体の85パーセントに上ります。

E インドネシア Indonesia

「きれいな水」のための 公衆衛生教育



インドネシアは水源が豊富な国ですが、1億人を超える人々が安全な飲料水を利用できず、そのうちの70%の人々が汚染された水源の水を飲んでます。公衆衛生の知識・理解が不足していることもあり、毎年数千人もの幼児が水系感染症により死亡しています。

J&Jは、2009年以来、Indonesian Communication Forum on Drinking Water Quality Management (FORKAMI)と提携し、ジャカルタのスラム街に住む子どもたちに公衆衛生教育を提供する「Duta Air dan Sanitasi」プロジェクトを進めてきました。

子どもたちは水の利用、健康、および公衆衛生について学び、さらに生徒自身が変革者となってその知識を地域社会に広げています。

F シンガポール Singapore

生徒たちに
健康的な食生活を



シンガポールのTeck Whye中学では、経済的に恵まれない家庭に生まれ、1日3回の食事または栄養価の高い食事をとれない生徒が毎年およそ250人います。

J&JはTeck Whye中学と協働し、従来からあった食券配布制度をより包括的なプログラムとして立ち上げました。これによって生徒たちは最低でも1日1回はきちんとした食事ができるようになります。

プログラムは、①家政学の授業による栄養教育②体育の授業による健康とフィットネス活動③学校で提供される昼食による健康的な食生活の育成の3つの要素で構成され実施されています。

G インド India

HIV/AIDS
予防プロジェクト



インドでは、南アフリカとジンバブエに次いで世界で3番目に多い250～300万人ものHIV陽性者が暮らしています。

J&Jは、2009年以来Population Services International (PSI)と協働して、HIVに感染するリスクが高い集団を対象としたプログラム「Project Saadhan」に取り組んできました。大きな目的は、HIV感染者数を減らすということです。

このプロジェクトではこれまでに、12000人以上もの人々を支援し、HIV感染リスクを減少させるための広報活動を実施し、質の高い予防製品の配布、カウンセリングや検査などさまざまなサービスを提供しています。

アジア・パシフィック
社会貢献親善大使について



アジア・パシフィック・コントリビューションズ・コミッティ (APCC) では、自ら積極的に社会貢献活動に取り組む社員を称えるとともに、各国の代表として交流を図る「アジア・パシフィック社会貢献親善大使」を14の国・地域ごとに任命しています。各国・地域の代表となった親善大使は、任期の1年間、それぞれの社会貢献に対する思いや経験を、各国の大使や、周りの社員、その家族、友人などと分かち合います。2011年で任命式は第5回目を迎えました。

健全な社会づくりと生活の質の向上に貢献した方々を称える

ヘルシー・ソサエティ賞

ヘルシー・ソサエティ賞とは

ヘルシー・ソサエティ賞は、学術・教育・医療・政治、ボランティア・市民活動などを通して、人々の健康、地域の保健、クオリティ・オブ・ライフ向上に多大な貢献をした個人、あるいは組織のリーダーを顕彰する目的で、公益社団法人日本看護協会とジョンソン・エンド・ジョンソン グループによって2004年に創設された賞です。

5つの受賞部門

ヘルシー・ソサエティ賞には下記の5つの部門があります。

■教育者部門

教育を深め、人々に更なる知識を与えた実績を対象とします。

■ボランティア部門

チャリティー活動等、非営利団体に活躍されている方、もしくは市民としての活動等で国内・国外で指導的役割を果たしている方を対象とします。

■医療従事者部門

社会的に不利な立場にあり援助を必要としている方々のケアのために特別な努力をされた方を対象とします。

■公職部門

通常求められている職務の範囲を超えて、国民または地域住民のために積極的な努力をされた方を対象とします。

■青年部門

30歳以下の青年で、他者のよりよい人生を送る助けとなる素晴らしい活動を行った方、または継続して行っている方を対象とします。

審査のプロセス

各界の著名な有識者8人からなる審査委員会の厳正なる審査によって受賞者が選出されます。



2012年4月10日、東京・千代田区の帝国ホテルで行われた第8回授賞式

第8回の受賞者のみなさん

平成23年度第8回のヘルシー・ソサエティ賞は、以下の3部門6名の方が受賞されました（敬称略）。

●教育者部門（国内）

片田敏孝
群馬大学大学院 工学研究科 教授

●教育者部門（国際）

赤木洋勝
有限会社国際水銀ラボ 所長

●ボランティア部門（国内）

國松孝次
認定NPO法人 救急ヘリ病院ネットワーク 理事長

●ボランティア部門（国際）

楠川富子
JICA シニア海外ボランティア、カンボジア国立小児病院 看護部長

●医療従事者部門

秋山正子
株式会社ケアーズ 代表取締役、白十字訪問看護ステーション 統括所長

●医療従事者部門

大森安恵
海老名総合病院・糖尿病センター センター長、東京女子医科大学 名誉教授

ジョンソン・エンド・ジョンソンの 責任として

私たちジョンソン・エンド・ジョンソンは一企業市民として、より良い社会をつくるために貢献することを責務としています。企業としてだけでなく、ジョンソン・エンド・ジョンソンで働く一人ひとりが社会と向かい、より積極的な活動を行っていくことを目指しています。



ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
コンシューマー カンパニー
代表取締役プレジデント

柴田 透

ヘルスケアカンパニーとして地域の健康に貢献する

Our CredoはJ&Jで働く社員の中に強く生きており、常に私たちJ&Jの文化の起点となっています。

Our Credoの第三の責任である地域社会への貢献は、社会とともに歩んでいる私たちにとって必ず実践しなければならない重要なものです。その責任を果たすために、社員一人ひとりが枠にとらわれずさまざまな場

面で良き市民としての責任を果たし、ヘルスケアカンパニーとして総合的に地域社会の健康に貢献することが必要です。これからも「奉仕する、与える」と言う大事なことを感じられる社会貢献活動に多くの社員が積極的に参加すると共に、多くの方が私たちの活動に興味を持ってくださり、活動の輪がさらに広がっていくことを願っています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) コンシューマー カンパニー

救急絆創膏などのウoundケア用品、ベビー用品、スキンケア用品、歯ブラシやマウスウォッシュなどのデンタルケア用品、目薬などのOTC医薬品など、日々の暮らしに欠かせない消費者向け健康関連製品を幅広く提供しています。



ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
代表取締役プレジデント

日色 保

一人ひとりが社会の担い手になる

地域の人々の視点で社会貢献活動に取り組むことは、社員一人ひとりが社会の担い手であるという意識を強めます。奉仕の精神が培われることにより、地域の人々に寄り添い、社会の枠組みの中で、会社やビジネスが果たすべき役割を考える力も養われます。

ヘルスケアの分野で事業を展開するJ&Jにとって、仕事への責任感と誇りを高めるこ

ともつながるでしょう。

Our Credoの第三の責任には、会社は社会の公器であると明確に示されています。会社として、社会と良好なつながりを持続けることに力を注ぐと同時に、社員が社会のさまざまな課題に関心を持ち、自分自身の課題としてとらえ、貢献しようと意識することが重要だと考えています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) メディカル カンパニー

外科、内科をはじめ幅広い診療領域で最新の医療機器・関連製品の輸入・製造販売を行っています。医療の専門家のパートナーとして、ワールドワイドに広がるJ&Jグループの製品を提供しています。



ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
ビジョンケア カンパニー
代表取締役プレジデント

デイビッド・R・スミス

社会貢献活動が成長のきっかけになる

J&Jは社会全体に対して良き市民、責任ある市民でありたいという姿勢を示しています。社会貢献活動はその姿勢を具体化したものです。私たちは資金的な支援だけでなく、社員の自主的な活動を奨励し、社会に貢献できるよう環境を整えています。社員こそが社会を変える力を持っていると考えるからです。

社会貢献活動に参加すると、人は満足を得るのみならず、喜びや新しい気づきも同時に得ることができます。私たちが日々生活し、働いている地域の人々の生活をよりよいものに変えていく、そういった活動を会社全体で支援する姿勢をこれからも大切にしていきます。

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) ビジョンケア カンパニー

1991年に日本で初めての使い捨てコンタクトレンズ「アキュビュー」を発売して以来、毎日新しいレンズに取りかえる1日使い捨てタイプの「ワンデー アキュビュー」やシリコーンハイドロゲル素材の1日使い捨てレンズ「ワンデー アキュビュー トゥルーアイ」のような革新的な製品を開発、提供してきました。



オーソ・クリニカル・
ダイアグノスティックス(株)
代表取締役社長

門倉 昭博

社会に根差す企業でありたい

助けを必要としている人々と同じ目線に立って「どのようなことに困っているか」「自分たちは何をしなければならないのか」と考え活動することで、私たちは多くのことを学びます。社会貢献を通じて思いやりや助け合いを知り、新たな視点が生まれ、それらはさらなる価値の創造にもつながります。私たちは社会に生かされている存在です。

地域の人々に事業活動を通じて関わり、貢献していくことはもちろん、社会に支えられていることに感謝し、普段の生活の中でも、助けを必要としている人々を考え、必要とされていることを実践することは、決して特別なことではありません。社会とのつながりを大切にし、社会に支えられ、信頼される企業であるために努めていきます。

オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス(株)

臨床検査業界のリーディングカンパニーとして、輸血検査、生化学検査、免疫血清検査、及び感染症検査分野に製品を提供しています。



ヤンセンファーマ(株)
代表取締役社長

トウーン・オーヴェルステンズ

本当に必要なものは何か常に考える

地域社会への貢献は、日本において、今こそかつてないほど必要とされています。そのために組織的な活動をしていくことは非常に重要なことだと考えています。

J&Jの役割として重要なのは、地域社会が何を本当に必要としているのか常に積極的に意識を向け、地域の人々のニーズをつか

み、応えていくことです。それがよりよい社会づくりにつながります。

寄付は最低限の社会貢献です。ほかにもできることは数多くあります。事業活動を通じて必要な製品を供給することもその1つ。また、その場限りではない希望を与えることも重要な社会貢献の要素です。

ヤンセンファーマ(株)

J&Jグループの医薬品部門であるヤンセン。日本の医薬品事業を担うヤンセンファーマ(株)は独自の開発部門を持ち、がん、免疫疾患、中枢神経疾患、疼痛、感染症などの治療領域で画期的な医薬品をお届けしています。



我が信条

我々の第一の責任は、我々の製品およびサービスを使用してくれる医師、看護師、患者、そして母親、父親をはじめとする、すべての顧客に対するものであると確信する。
顧客一人一人のニーズに応えるにあたり、我々の行なうすべての活動は質的に高い水準のものでなければならない。
適正な価格を維持するため、我々は常に製品原価を引き下げる努力をしなければならない。
顧客からの注文には、迅速、かつ正確に応えなければならない。
我々の取引先には、適正な利益をあげる機会を提供しなければならない。



我々の第二の責任は全社員——世界中で共に働く男性も女性も——に対するものである。
社員一人一人は個人として尊重され、その尊厳と価値が認められなければならない。
社員は安心して仕事に従事できなければならない。
待遇は公正かつ適切でなければならない。
働く環境は清潔で、整理整頓され、かつ安全でなければならない。
社員が家族に対する責任を十分果たすことができるよう、配慮しなければならない。
社員の提案、苦情が自由にできる環境でなければならない。
能力ある人々には、雇用、能力開発および昇進の機会が平等に与えられなければならない。
我々は有能な管理者を任命しなければならない。
そして、その行動は公正、かつ道義にかなったものでなければならない。



我々の第三の責任は、我々が生活し、働いている地域社会、
更には全世界の共同社会に対するものである。
我々は良き市民として、有益な社会事業および福祉に貢献し、適切な租税を負担しなければならない。
我々は社会の発展、健康の増進、教育の改善に寄与する活動に参画しなければならない。
我々が使用する施設を常に良好な状態に保ち、環境と資源の保護に努めなければならない。



我々の第四の、そして最後の責任は、会社の株主に対するものである。
事業は健全な利益を生まなければならない。
我々は新しい考えを試みなければならない。
研究開発は継続され、革新的な企画は開発され、失敗は償わなければならない。
新しい設備を購入し、新しい施設を整備し、新しい製品を市場に導入しなければならない。
逆境の時に備えて蓄積を行わなければならない。
これらすべての原則が実行されてはじめて、株主は正当な報酬を享受することができるものと確信する。



Johnson & Johnson



〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号
TEL : 03-4411-6720 FAX : 03-4411-6794
URL : <http://www.jjcc.gr.jp/>

